
月刊
FALCOM MAGAZINE
Vol.05
支援課メンバーの過去編が終わり、
物語は『零の軌跡』序章へ！
零の軌跡
四つの運命
著：田沢大典
イラスト：松竜
“執行者”レーヴェと
ヨシュアの新たな日々
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
テストに冒険に、勇者だって忙しい!?
みんな集まれ！
ファルコム学園
アニメ『空の軌跡』イベント開催決定！
ファルコムニュース
啄木鳥しんき
イラストメッセージ
『軌跡』シリーズドラマCD シナリオライター
田沢大典インタビュー



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



田沢 大典（たざわ だいすけ）

作家、シナリオライター。
日本ファルコム作品の『軌跡』シリーズのドラマCDシナリオを数多く手がけるほか、ゲームシナリオやノベライズなど、幅広いジャンルで活躍している。

シナリオライター・作家
田沢 大典氏
スペシャルインタビュー

『空の軌跡FC』から、最新作PSPゲーム『碧の軌跡』同梱版ドラマCDまで、数多くの『軌跡』シリーズのドラマCDシナリオを手がけてきたシナリオライターの田沢大典氏に、「日本ファルコムとは？そしてそのドラマCDとは？」とお話を伺った。

――ファルコム作品との出会いはいつ頃ですか?

田沢大典氏（以降　田沢　敬称略）：僕はゲームミュージックファンだったので、一番最初のファルコムさんとの接点は音楽です。ファルコムの曲をみんなが打ち込みでやってるのを当時のパソコン通信で聴いてたのが一番最初で。ゲーム本編じゃなくて音ありき、っていうちょっと変わったところからですね。僕はファミコン世代ドンピシャだったので、ファルコムさんはどうしてもPCゲームのイメージがあって、実はゲームとしてはあんまり接点がなかったんです。だから音楽として触れたのが最初ですね。当時の知り合いにファルコムの仕事をしてるって言うと、「おっ」となったりしますね。今ドラマCDで音関係に関わっているということは何かしらの因縁があったんでしょうね（笑）。でもあの時代に生きていて、ファルコムの音楽に魅せられなかった人はいないんじゃないかと思います。初代の英雄伝説、『ロマンシア』とか『ドラゴンスレイヤー』とかから全部聴いてはいるんですけど、やっぱり『イース』が一番かな。後は知人が『ソーサリアン』の追加シナリオの作曲をしてたりしたのでそこにも不思議な因縁はあったという。シナリオライターとしてこの業界に入ってからのファルコムさんとのお仕事は、『空の軌跡FC』のドラマCDが最初です。

> **僕の経歴の中でドラマCDという形での仕事は『空の軌跡FC』が一番最初なんです。**

――ドラマCDのシナリオライターというお仕事について教えてください。

田沢：僕の経歴の中でドラマCDという形での仕事は『空の軌跡FC』が一番最初なんです。それまでやっていた仕事のほとんどがゲームシナリオでした。実作業にあたって、空の軌跡のシナリオをいただいて「これを60分にまとめてください」と言われて、どうしましょう、と途方に暮れまして。一番最初に提出したものは90分弱で入らない、もっと削ってくれと怒れて、ほうぼうにご迷惑をかけながら仕上げたという記憶が（笑）。

作業としてはまず最初に資料をいただいて読み込むところからスタートです。読み込んだ上でこれをどう尺の中に収めるか考えて、プロットと呼ばれる「これくらいの尺感覚で、時間でここまでやります」という文章にしたものをファルコムさんにお出しします。それでファルコムさんのチェックをいただき、OKが出たらそこから書き始める。書きあがったらもう一回お送りして、キャラクターや設定に間違いがないか、などのやり取りを何回かしてから決定稿にします。そこから役者さんたちに台本として読んでもらい、音響監督さんたちとともに録音に臨むという流れです。

ドラマCDは『軌跡』シリーズを含めて40枚近く書いてるんですけど、それぐらいには肌に合う仕事なんだなぁ、と思います。何が



ドラマ CD イース＆空の軌跡 vs ヴァン・ジョー

合うかって言うと、声優さんっていう存在とがっつり組んでやれる仕事っていうのが自分にとって刺激的だったんですね。ドラマCDの皆で一斉に収録する感じが好きなんです。

書き上げた当時はもう一番最初だったんでワーッてやってる間に終わってたんで、漠然と面白かったなあという感想が残ったままです。ファーストチャプターが出たときには〝ファーストチャプター〟っていう名前もなく、その後のCD展開もなかったんで、一回やって終わったんです。そこで「あー面白かった、ドラマCDの仕事は僕は結構好きかもしれない」と思っていたら他社さんにお声をかけていただき、バタバタとやっている間に4年くらいが経ってました。この間で20枚くらいこなして、だいぶノウハウが溜まったところで再び「セカンドチャプターをやります」とお声かけをいただきました。一番最初にご迷惑をおかけした分の恩返しができるかな、と思ってお引き受けしました。

そうやって始めたSCのほうは、何回か「2枚組みにしてください」って泣きついてそのたび蹴られたという記憶があります（笑）。FCからシナリオ量が2倍に増えているのに、ドラマCDの尺が同じっていうのは、それは大変なことですよね、という。特にきつかったのはドラマCDでは当然のことなんですけど、スペクタクルシーンが書きにくい。そこはやっぱりゲームが強いなと感じました。逆にウェットなシーンや



ドラマ CD 英雄伝説 空の軌跡 AC
（アドバンスド・チャプター）



ドラマ CD 英雄伝説 空の軌跡 ウロボロス・レポート

色っぽい、切ないシーンっていうのは音声のほうが強いなと。

――ゲームのシナリオからドラマCDのシナリオを書く手順を教えてください。

田沢：手順としてはシナリオを読んで、物語として必要なシーンとファンの人が見たいであろうシーンをまずチョイスします。そのチョイスを繰り返してだいたいこの辺のシーンを、というあたりをつけて頭の中で時間計算と配分をしてプロットを出します。OKをもらったら実際書くわけですけど、当然そのままセリフを全部書き写すのではなく、耳で理解しづらい、できないものを削除したかわりに、別の表現で情報を足していきます。そして、何回もそれを声に出します。いっぱい読んで耳で聞いて、より聞きやすいように単語を変えるとか順番を変えるとか。これがしんどいんですよ！ 60分ぶんの台本を毎回ひとりで、声色を変えて読みながら赤ペンでチェック入れて、を何回か繰り返すんで、ぐったりします（笑）。でもこれをやらないと確実にクオリティーが落ちるので。そして収録に立ち会います。収録の時は言い間違いやセリフのテンションをチェックします。音響監督の要望に応じて、その場でセリフを書き換えたり追加したりもします。

書いてる時の声のイメージに関しては、先に「このキャラはたぶんこのキャストでいく」っていうのをもらうんですよ。わかってる時はこの人がしゃべるんだっていう前提でシナリオを書きます。声



ドラマ CD 英雄伝説 空の軌跡 オリビエ物語
〜未完成の叙事詩〜

のイメージがあるほうがセリフが出てきやすいものですね。

——ファルコムさんのゲームについてどう思われますか？

田沢：最初に『空の軌跡 FC』のシナリオを読んだときに驚いたのが、エステルが女主人公だったってことですね。当時、ゲームシナリオを書き始めて10年ちょいだったんですけど、シナリオライターの仲間の間で女主人公もののRPGは企画がなかなか通らない、というのが定説だったんです。そんな中、それをサラリとやってのけて、しかもこの天真爛漫な太陽みたいなキャラクターっていうのがすごく衝撃的でした。今でこそ非常に主人公然として見えるエステルですけど、FCの序盤はわりと普通の女の子なんですよね。元気印ではあるけど、こんな普通の女の子が主人公をはるんだ、と。女の子であるエステルが主人公であることの驚きは、逆に自分が業界内の人間だからこそ感じることなんじゃないかと。コンシューマーゲームだとやっぱり一番の主力購買層が若い男の子なんですよね。若い男の子に女主人公っていうのはわかりづらいんじゃないか、ということがあって。でも、ちょうどいろんなものがシフトしはじめていて、受け手側の感覚としても女の子の主人公って全然アリじゃないかと、むしろどうして少ないんだろう、と皆が思い始めた頃にポンと出たんです。だからエステルってここまで人気のある子になったんだろうな、と思います。あと、FCに関しては「終わってない！」っていうところです(笑)。いいところで！　って。やきもきしてたらファンの皆さまも相当やきもきしてたという。

SCのシナリオを読んだ時に思ったのは、今回は本当にエステルが主人公してるなと。しかも行動原理が非常に女の子らしい、好きな男の子を助けるんだっていう感じで。しかも「私を捨てて逃げるな！」と怒るために追いかける。それは女の子ならではのしなやかさと強さがあります。これはオンリーワンだなと思いました。後はやっぱりサブキャラクターを含めてみんな魅力的だな、と。ここに来てみんなそれぞれの話が繋がっていくというこの構成はすごいですよね。

物語の中で自分が好きなのは、やっぱりSCのエステルがヨシュアと再会して「ヨシュアに届くことができた」っていうシーンです。ドラマCDでもここだけはどうしても入れて尺を取りますよ、という風に言ってやったので一番印象が強いですね。後はFCでアガットがティータにビンタをするところ。これは本当にビックリしました。ガタイのいい兄ちゃんが、かわいい女の子を本気で殴る。一歩間違ったら抗議が来てもおかしくない内容です。でもあれは殴らないと描けないものが描かれたんで、納得できる、ぼやかすんじゃなくて、ちゃんと強く描く。この覚悟の決め方はすごいなと思いましたね。リスクを背負わなきゃいけないことなんで、普通は会社として止めるんですよ。でも止めないってことはファルコムさんはそういう会社さんなんだと。

——現状出ている作品別のお話になるのですが、ヨシュア、ティータ、クローゼと、キャラクターをピックアップしたドラマCDのシリーズがあります。これはどういった形のオファーになっていたのですか？

田沢：軌跡シリーズっていうのはいろんなキャラがたくさん出てきて、オーケストラの編成みたいに織り成す物語なので、最初のCDはエステルとヨシュアのふたりをソリストにたとえてピックアップしました。けれど、今度は別のキャラクター、例えばティータやクローゼをソリストに見立てて別の組み方をしましょう、という作り方をしたのが、その後のシリーズですね。

声がつくことでよりグッとくるシーンが多くなっているのが確かで人気もあるので続けたいな、と。各キャラクターにこんな魅力的なシーンがいっぱいあるのでピックアップしていけるでしょう、というのでたしか話が始まったんだと思います。一発目はやっぱり人気が断トツだったヨシュアで、彼は莫大なバックボーンを持っていますし、ゲーム本編ではあまり描かれていないところもあったので。

ゲームで見られなかった物語をドラマCDで描く作業っていうのは、ヨシュアだったらヨシュアのファンがこれを聴きたいだろうなっていうシーンをまずピックアップするところから始めます。それからそのピックアップしたシーンを無理なく繋げられる構成は何かな、と考えて組んでいきます。『空の軌跡』はとにかく物語が膨大な量で３ｒｄまで含めるとエピソードは山ほどある。なので、いろんなところから繋げるためのエピソードを引っぱってきたりします。無理のない構成を作るためにオリジナルを作らなきゃいけないところはファルコムさんとご相談をしながら組んでいく、と。ファルコムさんから使ってほしい設定をいただくこともあります。

AC（アドバンスドチャプター）はどこをドラマCD化ということをいわずにやったものなんですけど、最初のプロットからファルコムさんにご協力いただいた点で大きく違います。これまでは常に元があるものから「ここをやりたいんです」ってピックアップした話だったんですけど、何もないところから作り始めなきゃならなかったので何回かディスカッションをさせていただきました。逆に言うとそこが終わっちゃえば後は同じ工程なんで後はいつも通りです。話が脱線しますけど、『空の軌跡』は——『零の軌跡』も含めるとさらに顕著ですが——他のRPGと比べると基本的に組織が重要な位置を占める話なんですね。スーパーヒーローが世界を救う話じゃないんです。組織の中にいる一員が無力さを知りながら、でも戦う、という人たちの物語なんです。エステルはたしかにリベール異変を救ったけれど、彼女は救世主でもなんでもない、ただの遊撃士でしかない。救えないものもたくさんある、それでも前に進むことで彼女のキャラクターが立つと。これはあんまり他の作品には見られないですね。ロイド

最初に『空の軌跡FC』のシナリオを読んだときに驚いたのが、エステルが女主人公だったってことですね。



ドラマ CD 英雄伝説 空の軌跡 ヨシュア物語
～封じられた記憶～

くんなんかが特に。彼は公務員ですからね（笑）。組織を描くのは大変なんですよ。組織に属してないとわからないことがあったり、普通の救世主を描くより多くの知識量を必要とされる。絶対的な悪も存在しないし、各自が各自の思惑で動いて大きな混乱を引き起こしていくところが非常にリアルだな、と。言ってしまえば、「9.11」以降の作品だなと思います。組織を描くと登場人物が増えるので、ドラマCDを書くのも大変になるんですが（笑）、お客様に受け入れられている理由もここなんだろうな、とは思います。

――『イースvs.空の軌跡 オルタナティブ・サーガ』そして、最新作『英雄伝説 碧の軌跡』のキャラアニ限定版に収録される〝ヴァン・ジョー〟シリーズについてのお話をお聞かせください。

田沢：そもそもの発端はファルコムさんから「ギャグをやりたい」と言われて、こちらで出した企画があったんですよ。でもそれは「はじけきれてない」と。どうしたらはじけられるんだろうということになって打ち合わせをしているうちに、ファルコム作品にたくさん出演されている銀河万丈さんがひとりラスボス状態になってもらうのはいいんじゃない、と。そんなネタ大丈夫なんですか、っていうところが発端です。銀河さんと言えば業界の重鎮です。その人を使ってギャグを書くとなると、事務所に確認を取らなければいけませんよね、ってお聞きしたらもう取ったと。じゃあ書くしかないじゃないですか！　じゃあ書きますよ！　と書きました（笑）。他社さんでやってる作品ではこういうテイストのものは経験があったんで、勝手知ったるではあったんですけど、まずファルコム作品でこれをやっていいのかという驚きと、銀河さんでこれやっていいのっていうところで大丈夫かなと思っていたんです。でも蓋を開けてみれば全然OKだったので安心しました。結局は5役くらいやっていただきましたね。作品全体としては、これは本編とは完全にシャットアウトされたお祭り的な話なので、きちんと区切ってやることには気をつけました。



ドラマ CD 英雄伝説 零の軌跡 ～光と闇の棲む街～

――『零の軌跡』になって街もキャラクターも変わったのですが、ある意味異色、近代的なクロスベルでのエステルとヨシュアを描こうというのが「プレストーリー」ですよね。この辺りではファルコムさんとどういったお話をされたんですか？

田沢：これに関しては啄木鳥しんきさんのコミックありきという形ですね。トヴァルくんという面白いキャラも出てきますし、これはドラマCDにする価値があると。ゲームがあって、啄木鳥さんのコミックがあって、そのどちらの要素も織り込んでいるものですね。はじめにこれを読んだ時は正直、「啄木鳥さんに、自分の代わりにドラマCD書いてもらえないかな」と思いました（笑）。オリジナルなのにそこにいるのがちゃんとエステルとヨシュアであることと、話の展開からオチに至るま



ドラマ CD 英雄伝説 零の軌跡 プレストーリー
―審判の指環―



英雄伝説 空の軌跡 ドラマ CD クローゼ物語
～翼、羽ばたくとき～

での「空の軌跡ってこういう話だよね」というところをコミックス1巻にきちんと収めてるのが本当にうまくて。それがすごいな、と。同時にこれはドラマCDとしては楽だと。逆に言うとファルコムさんと啄木鳥さんの間にコンセンサスが取れてて、オフィシャルでこういうことがありました、となっているので、ここから逸脱しなければなんら問題はないということなんです。だから楽をさせていただきました。トヴァルというキャラクターを含めて完成されているのでいじるところはあまり無かったです。ヨシュアが自分の過去に囚われるシーンとかはアレンジさせていただいたんですけど、それは単純にドラマCDとして聴いた時に効果的なのはこういう演出かな、という点でやったものですね。このシーンも、啄木鳥さんの意図が明確なのでアレンジは悩まなかったですね。

――同梱版のドラマCDのお仕事として『零の軌跡』に触れた時の感想はいかがでしたか？

田沢：さっき言いましたが組織論の話が強くなっているなと思いました。『零の軌跡』という新シリーズを立ち上げます、と聞いた時に『空の軌跡』がこんなに人気が出て、後を継ぐ作品、キャラクターは大変なんじゃないかと正直思ってたんですよ。でもシナリオを読んで、杞憂だったなと。『空の軌跡』は女主人公のエステルというのを前面に押し出した話、今回は男の子の主人公ですけど公務員、組織の中で何かを成そうとする子の話です。ゲームのシステムもそれに沿って組まれている。軌跡シリーズの、何か依頼をこなしていくという点が遊撃士ではなく特務支援課になったアレンジと、ある種自由に動ける遊撃士と、国家に属するという枷を持った支援課、という対比と変化を非常にうまく繋いだな、と。でもドラマCDとしてやるのはやっぱり量が多い、どうすればいいんだと思いました。『空の軌跡』の時はダイジェスト的にやったけど、今度は長い話をちゃんとやろうとおっしゃっていただいたので。ゲームの同梱版ドラマCDの役割ってなんだ、と考えた時によりゲームへの没入感を出すものがいいだろうな、そうならやっぱり声の力だと。こういう感じのこういう声でしゃべる子です、っていうのをゲーム本編になぞらえて聞かせていって、だからこの子はこういうものの考え方をするんだなということが聞いている人に伝わる。それによってもっとキャラを好きになってもらうのがドラマCDの役割だろうな、と。要は物語の最初のナビゲーターですね。フルボイスではないゲームのキャラをユーザー側が掘り下げて、より理解することができるドラマCDを描こうと思いました。後は4人の声で特務支援課がどういうところなのか、どういうチームなのかを見せてあげたい、というのもありました。4人の会話の

ファルコムさんの作品の中でもロイドくんは『正義感』が行動原理になっているところが、逆にめずらしいんじゃないかな。

一連の流れ、普段どういう風にしゃべってるのかというのを想像のひとつに加えてもらえればより楽しくなるんじゃないかなというところですね。

――では、『零の軌跡』のキャラクターの中で特に好きなキャラクターついてお聞かせください。

田沢：自分はどうしても過去のあるキャラクターが好きなので、ティオとランディはいいなと思いますね。今はファルコムマガジンで小説を書かせていただいているので、この子たちがここに至った理由がわかるなあという感じで。『零』で言うとやっぱり特務支援課の4人がキャラが立っていていですね。『碧』のほうは敵のキャラが濃いから、ロイドくんたちは大丈夫かなと心配になりました(笑)。ファルコムさんの作品の中でもロイドくんは『正義感』が行動原理になっているところが、逆にめずらしいんじゃないかな。エステルは一本気ですけどわりと私利私欲で動く子なんで、そういう意味で正義感っていうのを押し出してるキャラクターっていうのはめずらしいですね。正義感を押し出してるけど鬱陶しくはないっていうあのさじ加減は非常に絶妙だと思いました。

――ファルコムマガジンのほうで連載されている小説『零の軌跡』についてお聞かせください。

田沢：僕は今まで小説については読みきりが多かったので、毎回締め切りが来るというこの状態は初めてなんですよ。これはきつい(笑)。でも、ファルコムさんからお話をお伺いしたら、ファルコムファンにはなんと50代の方がいらっしゃるとのこと。その方がこの小説を読んでいただいているかは分かりませんが、それほど幅広い世代の方々に読んでいただけるとなると身が引き締まる思いですね。ノベライズをするにあたってゲームそのままではなく、やっぱりアレンジメントが欲しいと言われてサブストーリー的なものを考えた結果、過去編が一番いいんじゃないかと。でもこれはたくさん設定に触れなければならなかったので、四苦八苦しながらファルコムさんのほうにもがっつりと監修をお願いして進めました。ファルコムさんから渡されたそれぞれのキャラの過去の設定を、自分なりに膨らませていって、他の設定との齟齬がないかを確認していただく、という作業ですね。

――同じくファルコムマガジンで連載されているコミック『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』の原作についてお聞かせください。

田沢：あれはもうレーヴェは人気があるので過去をがっつり描いてあげようかと。後は「ウロボロスレポート」の時もそうだったんですけど、FCとSCを裏側から見て描くのもありだろうということですね。ゲーム本編で描かれているところやドラマCDで出てきた設定などをファルコムさんに確認していただいて、どこをどう埋めるかという作業をしました。でも情報よりは、レーヴェの心情を汲むほうが難しかったですね。心理状態がわかればイベントはいくらでも出てきますから。難しいところは、人気のあるキャラクターの想像の余地を残している部分を埋めていっちゃうところなんです。お客様の想像を上回るか、納得していただかないといけない。そこが怖いところですけど、描き手さんがきつい話を描いても応えてく



英雄伝説 空の軌跡 ドラマ CD ティータ物語
〜繋がる想い〜

れる画力の方なので問題ないですね。

——『碧の軌跡』の同梱版のドラマCD、それからキャラアニ特典のミニドラマ『vs.ヴァン・ジョー』についてお聞かせください。

田沢：ゲーム同梱版で『碧』の冒頭をドラマCDでやるのはどうかと話していたんです。それなら『零』と『碧』の間の話を新しいキャラなども出して描けるんじゃないかと。そうやって流れが決まって今は調整中です。『零』の時とは違って特務支援課が一旦チームとして完成された後の話なのでアットホーム感が違う、その彼らが『碧』のゲームの冒頭にどうつながっていくのかというところです。

ヴァン・ジョーについてはもう、聞いたことがある方には「この前と同じアレです」と。聞いたことがない方はびっくりしないで……と言ってもびっくりするだろうから存分にびっくりしてください（笑）。

——では今後のファルコムさんにどんなことを期待して、どんな仕事をしてみたいですか？

田沢：軌跡シリーズはちゃんと完結してくれますよね!?（笑）っていうのは僕だけじゃなくてファンの方も思ってるでしょうけど。この作品は組織論が関わってくる社会的な問題を扱っている。一時期セカイ系がもてはやされた時期があったんですけど、僕は今だからこそこういう、社会の中で自分がどういう役割を持ったらいいのか、ということを若年層向けエンターテイメントでもやるべきだと思っているんです。ファルコムさんはそれをかなり正面きって、でもあくまでエンターテイメントとしてやっているというところをすごく尊敬していますし、そういう作品に関わらせていただけるのは本当にうれしいですね。だからこれは是非とも完結させてほしい。そしてゲームをプレイした人たちにいろいろ考えてほしいなと思います。『空』も『零』も、プレイした後に「ああ面白かった」だけではなくて「自分はどうなんだろう？」と考えるような、そういう話だと思うんですね。常に問題を問いかけ続けてくれる。そこをファルコムさんに期待しています。

今後の仕事についてですが、舞台をやってみたいですね。あくまで夢ですけど（笑）。BGMはjdkバンドの生演奏とかで。キャラを演じてくださっている声優さんの中には朗読劇をやっていらっしゃる方がいて、それが独特の雰囲気があるんですよ。それをこのファルコム作品でやるのは面白いんじゃないかな、と。達者な役者さんが多いのでもったいない。生の臨場感とかライブ感は非常に甘美なものなので、これは是非なんらかの形で皆様の前に披露できたらいいなあ、と思っています。

——それでは最後に、田沢さんの作品に触れたファンの方に向けてメッセージをお願いします。

田沢：10代から50代まで幅広いファンを抱えていらっしゃるファルコムさんで、万人に受け入れられるのって相当難しいとは思うんです。でも難しいからできません、ではなく、ひとりでも多くのお客様に満足していただける作品を作ろうと思っています。後は、英雄伝説シリーズはエンターテインメントでありながら、社会について考える良い機会にもなる得る作品なので、より多くの人に勧めてもらいたいです。難しくてわからないっていう人もいると思うんですけど、でもこういう作品を求めてる人たちは結構いるだろうなと。年齢が上になればなるほど、学生時代にファルコム作品をやってたけど、今は忙しくて……という人が自分の周りには多い。けど、それはもったいないんじゃないかなと思います。今の方が全然面白く見れる、遊べる作品なのに、と。軌跡シリーズ、特に『零』は社会人経験のある人のほうが絶対面白く感じると思うんです。そういう人たちにもアプローチをしていきたいので、ファンの皆様、軌跡シリーズの応援、なにとぞよろしくお願いします。



英雄伝説 空の軌跡 FC ドラマ CD 〜去り行く決意〜



英雄伝説 空の軌跡 SC ドラマ CD 〜繋がる絆〜



THE LEGEND OF HEROES 碧の軌跡 アオノキセキ 情報課通信

碧の軌跡の情報をいち早くお届け!!

声で聴く、『零』と『碧』を繋ぐ物語

9月29日に発売が迫る『碧の軌跡』。その同梱ドラマCDのジャケットがついに到着。このドラマCDでは、前作『零の軌跡』から『碧の軌跡』に至るまでの間に起きた、ある出来事が描かれている。また、7月12日から店頭で配布されるファルコムマガジン特別出張版では、このドラマCDの冒頭部分を小説化して特別に紹介。ドラマCDが待ちきれないファンはチェックを忘れないようにしよう。



気になる『碧の軌跡』キャラクターをPICK UP!

『碧の軌跡』で新たに登場するシャーリィとシグムント。前作で明かされなかったランディの過去が、親族である彼らの登場によってより深い部分まで明らかになる予感だ。陽気な人柄の内に絶大なパワーを秘めたランディに隠された真実とは……。そして、かつてランディも所属していた猟兵団『赤い星座』とは!?



ランディ・オルランド（CV：三木眞一郎）
▶特務支援課の兄貴分でムードメーカーだったランディ。彼の過去に隠された暗い影の正体とは一体……。



シグムント・オルランド（CV:稲田徹）
▶威圧的な外見からはただ者ではない雰囲気が漂う。ランディは叔父である彼とどう関わってくるのか。



シャーリィ・オルランド（CV：竹達彩奈）
◀巨大な武器が入ったケースを抱えて戦場を飛び回るランディのいとこ。愛らしさの中に秘めた狂気とは!?

製品情報

発売日：2011年9月29日(木)発売予定
ジャンル：ストーリー RPG
対応機種：PSP（プレイステーション・ポータブル）専用
UMD枚数：1枚
メモリ：未定
プレイヤー人数：1人
価格：通常版：6,090円（税抜5,800円
ドラマCD同梱版：7,980円（税抜7,600円）
完全予約限定版：9,240円（税抜8,800円）
CEROレーティング：未定

特報! ▶▶▶あの名作の数々が、PSP the Best&スーパープライスで甦る!

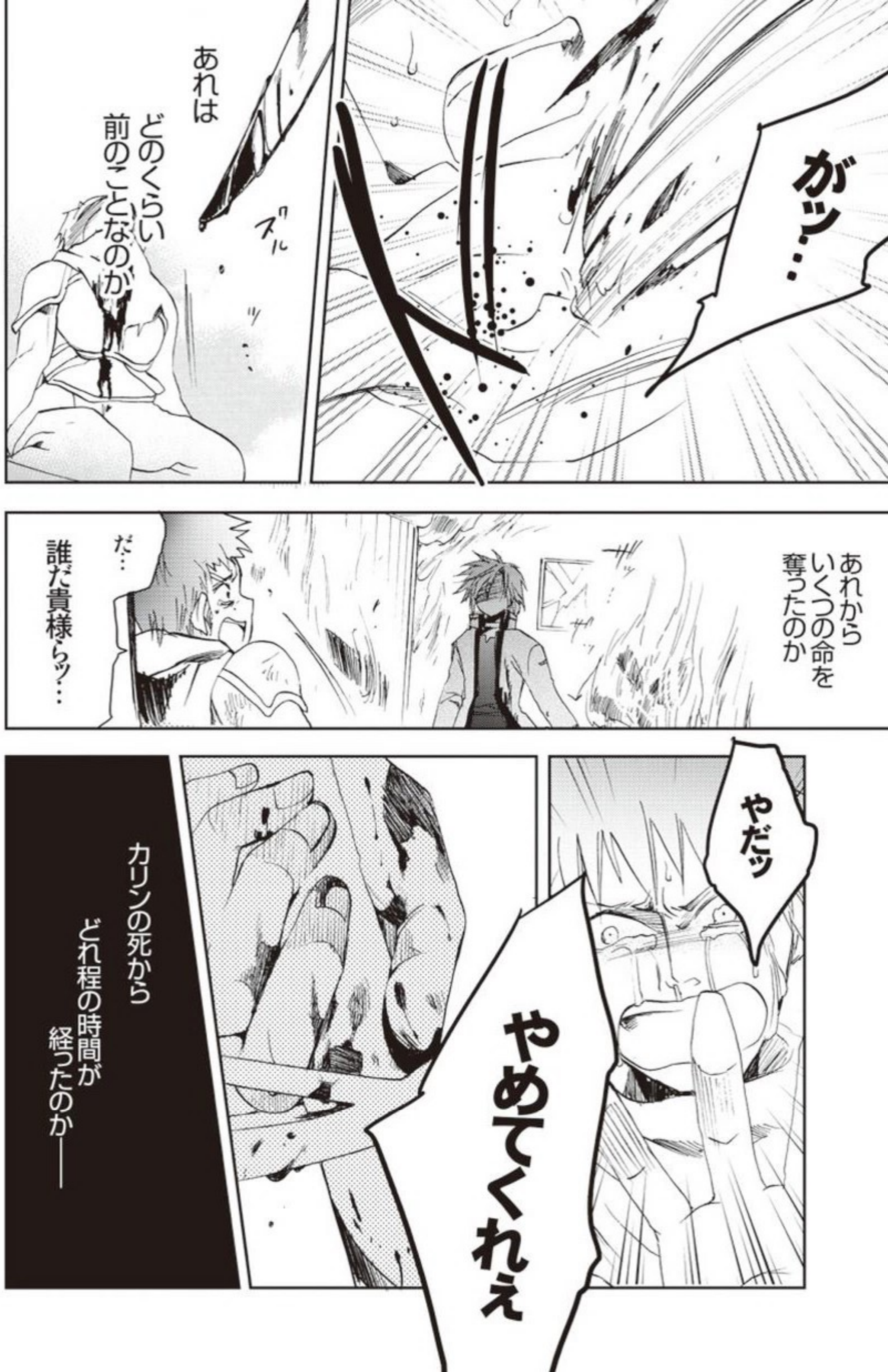

Ys SEVEN（イースセブン）PSP the Best


イース フェルガナの誓い スーパープライス


イースⅠ&Ⅱ クロニクルズ PSP the Best


イースvs.空の軌跡 オルタナティブ・サーガ PSP the Best

日本ファルコムの名作4タイトルが、7月14日にお手ごろ価格で発売されることが決定した。気になるタイトルは、『Ys SEVEN(イースセブン)』、『イースⅠ&Ⅱクロニクルズ』、『イースvs.空の軌跡 オルタナティブ・サーガ』、『イース フェルガナの誓い』だ。価格はすべて2,940円（税込）。『碧の軌跡』の発売まであと3ヶ月。短いようで長いこの間に、日本ファルコムの名作をお手ごろ価格でプレイしてみよう!





空の軌跡外伝

レーヴェ物語

第四話

脚本 田沢大典

作画 楽時たらひ


…これで最後か
ぐあッ…


レーヴェ
こっちの殲滅は完了したわ
そうか
つまんない…ここのお兄さんたち弱すぎるわ
低クラスの猟兵が相手だったからな
手応えなくても仕方は…


レーヴェ
ヨシュア――
……
確認してきた
もう生きている者はいない


…では…戻ろう
ヨシュアを連れて結社に入ってから
あの男は現れた
その子の心を
治してあげよう
それは教授と名乗る男が行う実験だった
あの時から壊れたままだったヨシュアを
俺にはどうする術もなかったのは事実で
だから俺は――…
ヨシュアをその男に預けることにした


結果として
ヨシュアはこうして
立ち直り
俺と同じ
執行者として
働くことを選んだ
もっと殺したかったわ
ははは
レンは
強いなぁ…

…レーヴェ?
どうしたの
レーヴェ
いや
…何でも
ない
迷うことは
なかった
俺達は
生きなければ
いけなかった


ギーンッ
うあッ
ザザッ
踏み込みが甘い
懐に飛び込む時はひとつのためらいもするな
勢いが死んでは飛び込む意味がない
——わかった


もう一回…
ヨシュアレーヴェ
そろそろ時間よ♪
あぁ そうだったな
時間?
うふふ そうよ レンが開くお茶会の時間なの
稽古のあとでーって約束したんだから
ねーレーヴェ
んっ
二人とも汗くさぁい
もう レディの前では気を使わなくちゃダメよ?


ヨシュア
おかわりはいかが？
うん いただくよ
おいしいでしょ
うん
うふふ おかしも まだいっぱいあるのよ
──ごくろう様 レーヴェ

昨日の猟兵団狩りは見事だったね
一匹残らず「掃除」できた
君達の活躍は盟主も喜んでおられたよ
剣帝に漆黒の牙… そして殲滅天使
君達には少々物足りない相手だったかな
…レンも良い感じに仕上がったね


君達が"楽園"から連れて帰った時は
彼女がこれ程使えるとは思わなかったよ


こいつらのこういう所は同意しかねる
用件はなんだ
あぁ
君に会わせたい人がいるんだよ
——呼び立てて申し訳ありませんレオンハルト
一度あなたと剣を交えたいと思っていまして


我が名はアリアンロード
使徒の第七柱を任されています
何卒よしなに…
…使…徒…?
何という凄まじい覇気…!
盟主直属の七柱のうちの一人
いわば結社の幹部さ
手合わせできるなんてまたとないチャンスだよ
フッ…
…それは光栄だ…!
盟主直属の一柱
その実力と相まみえるとは
願ってもない!!


強い
ぐっ…


これが使徒の実力…
今まで交えたどの剣よりも速く 鋭く
そして
重い!!
――考えごとですか?




――よい太刀筋です
《剣帝》
カラン…
はぁ…
次は私も本来使用している槍で手合わせさせていただきます


大事な剣を折ってしまいました
すぐに替わりを用意しましょう
コッ
コッ
コッ
…あれで本領ではないというのか…
まさしく《修羅》の如き強さ…
強くならなければ
もっと
もっと…!!


——そうですか
ご苦労でした
アリアンロード
…身を以って
確信致しました
彼はあの時より
歪みなく
そして
より堅い決意を
内に秘めた良き剣士です
剣帝
レオンハルト
彼の実力ならば
相応しいと
私は判断します
ケルンバイターは
彼にこそ
与えるべきでは
ないかと——…
——次の仕事だよ
ヨシュア



啄木鳥しんき
ファルコム大好き！





まだ汚れを知らないアドルさん16さい。

みんな集まれ! ファルコム学園

新久保だいすけ

親切な魔物



完璧なる作戦



冒険



後悔



めんどくさい人達



サルバナナ



超難問



小説版
零の軌跡　四つの運命

第五章　抗争の疑惑（前編）

田沢　大典
Illustration　松竜

　支援課ビルの一階にある台所は、夜だというのにずいぶんと賑やかだった。このさほど広くないスペースに、支援課の四人が集まっているからだ。
　それぞれの手には、飲み物がある。ランディは、ブランデーをストレートで。ティオは、約束どおりロイドに作ってもらったココアのホイップクリームのせ。ロイドとエリィは紅茶。これは、ロイドがココアを作っている間にエリィが淹れたものである。
　ランディとティオは台所にある小さなテーブルにもたれかかり、エリィとロイドはシンクの側に立って、おしゃべりに興じていた。
「ココアの良い香り……私も紅茶じゃなくて、ココアにすればよかったかも」
「エリィさん、ひと口飲みますか？」
　ティオがココアの入ったマグカップを差し出すが、エリィは緩やかに首を振って断った。
「口の中で紅茶の味とまざっちゃうと、ちょっとね」
　確かになぁ、とランディが軽く笑った。
「ま、ティオすけにはアルコールもカフェインも、まだ早いってな」
　ほろ酔いの顔のランディを、ティオがジト目で見つめる。
「ランディさんのように醜態をさらすぐらいなら、一生アルコールは飲みません」
「し、醜態って……！」
　思わぬ反論に驚くランディ。その様子を見て、エリィがクスクスと笑った。

「おいおい、お嬢まで笑うことねぇじゃんかよ」
「ふふっ、ごめんなさい。でも、私もお酒は嗜まないから、ティオちゃんとさほど変わらない意見ね」
　エリィの言葉に、ランディは大げさに天を仰いだ。
「まったく、なんて嘆かわしい。人生に極上の彩りを添える、美酒の味を知らないなんて勿体ないっての！」
　酔いのせいか、いつもよりアクションもオーバー気味だ。
「あら、味なら知っているわよ。お菓子の中に、お酒を使うものとかがあるじゃない」
「酒を使ったお菓子？」
「ええ。メジャーなところだと、チョコレートケーキの香りづけとか。あと、チョコレートの中にウイスキーが入っているものもあるわね」
　エリィの説明に、感心したように膝を叩くランディ。
「チョコレートとウイスキーか。チョコが甘すぎなけりゃ、結構イケる組み合わせだな」
「香りを重視してる味つけだから、そんなに甘くないわ。言われてみれば、男性向けかもね」
　いいねぇ、とのってくるランディ。興味津々といった様子だ。
「レミフェリア出身の有名なパティシエがやっているお店なのよ。以前、友人に連れて行ってもらったことがあるんだけど、みんなで、そこのお店に行くのもいいわね。ティオちゃん好みの甘いお菓子もあるし」
　その言葉に、ティオも思わず目を輝かせる。
「……それはグッジョブな提案です」
「それじゃあ、今度のお休みにでも。ロイドもどう？」
「うん、いいんじゃないかな」
　ロイドの答えを聞いて、ティオが「決まりですね」と言い、胸の前で手のひらをあわせた。喜ぶエリィたち。話は既に、どんなケーキがあるのか、またどれを買うかで盛り上がっている。
　しかし、ロイドは内心、別のことを考えていた。
　自分たちは、各人さまざまな経緯を経て、この特務支援課という名の下に集まった。いわば、寄り合い所帯だ。生まれも育ちも違えば、長けている能力も違う。
　にも関わらず、自分たちはひとつの『チーム』として、結構まとまっているのではないか。ロイドは最近そう思うようになっていた。
　お互いがお互いを尊重し、信頼する。言葉では簡単だが、実際にはプライドや能力差などがあって、簡単にできるものではない。しかし、自分たちは自然とそれができるようになりつつある、と感じていた。
　組み合わせの妙というやつだろうか。もしこれを狙ってメ

ンバーを集めたとしたら、セルゲイ課長は相当の切れ者だな、とロイドは思った。
　そして同時に、なんの経験もない自分がリーダーとしてなんとかやっていけているのは、彼らあってこそなのだ、そう認識した。
「じゃ、ロイドのおごりってことでひとつ。それでいいか？」
「ああ、うん。……って、なんでそうなるんだよ!?」
　考え事で上の空だったのをランディに見抜かれていたらしい。突然話を振られ、つい生返事をしてしまった。
「ロイドさん、ありがとうございます」
　すかさずティオが援護射撃を行う。こういう時は、仲間のチームワークの良さが恨めしい。
　ちょっと、とたしなめるエリィの声を聞きながら、ロイドは改めて思った。
　前言撤回。このメンバーのリーダーをやるのは、やっぱりそれなりに苦労が伴う。

　龍老飯店は、クロスベル市街に店を構える東方料理の専門店である。火と油が命の東方料理は、使う食材・調味料・調理法すべてが豊富で、かなりのバリエーションを誇る。龍老飯店は遠く東方から呼び寄せた料理人で本場の味を提供し、ファンも多い。
　店内は広く、テーブル席とカウンターの両方を合わせれば、かなりの人数が収容できる。店内は東方風の飾りつけがされており、朱色がかった木材を基調としたカラーリングに、クロスベル地方ではあまり見られない意匠のついたてが置かれている。テーブルは大きく、六人ほど座れるほどの大きさだ。テーブルの上には、さまざまな東方料理が並び、湯気を立てていた。
　そのテーブルに今、ロイドたち支援課の人間と、ひとりの女性が座っている。年の頃は二十代半ばだろうか。グレーがかったベリーショートの髪には、ゴーグルがヘアバンドの代わりのようについている。くりっとした大きな目は、彼女の旺盛な好奇心を表しているかのようだ。服装は灰色のタートルネックに、カーキ色のショートコートを羽織っており、パンツルックと相まって活動的な印象を与えていた。
　彼女の傍らには、写真を撮るためのオーバルカメラが置いてある。聡い人間なら、それだけで彼女の職業の予想がつくだろう。
　グレイス・リン。それが彼女の名前である。仕事は、報道誌クロスベルタイムズの記者。クロスベルタイムズは、事件や社会問題への鋭い切り口と、体制への批判も辞さないという姿勢が多くのファンの心を掴んでいた。
　クロスベルタイムズは何度か警察批判も行ってきた。現に、ロイドたち支援課の初任務となった『ジオフロント少年救出事件』でも取材に来て、遊撃士のアリオスにおいしいところを持っていかれたロイドたちを面白おかしくかき立てていた。両者の関係は良好とは言えず、どちらかというと悪い方だ。しかし今は、こうして同じテーブルを囲み、東方料理に舌鼓を打っている。
「どう？　なかなかイケるでしょ」
　グレイスが、肘をついた両手の上にあごを乗せたポーズで言う。それに、エリィが素直にうなずいた。
「確かに美味しいです。かなり腕の立つコックがいるみたいですね」
　その横に座るティオは、ひたすら口を動かしていた。口にしていた肉団子をごっくんと飲み込み、ふぅ、と恍惚の表情を浮かべる。
　チャーハンを掻き込んでいたランディも、うんうんとうなずき、レンゲを置いた。
「しかし、こんな美味い料理に酒がないなんてありえねぇぜ。なぁロイド、せっかくのおごりだし、ちょっとぐらい良いだろ？」
　ロイドに向かって猫なで声を上げるランディ。そんなランディにあきれた様子でロイドが答える。
「駄目だって。今は仕事中なんだから、ケジメはつけないと」
　すげない言葉を聞いて、ランディは不満げだ。
「はいはい。ったく、ウチのリーダーは固いねぇ」
　それまでもくもくと食べていたティオが、ぽつりとつぶやいた。
「ランディさんが柔らかすぎるのではないかと……」
「そうね、さすがに仕事中にお酒はどうかと思うわ」
　エリィにまで同意されては、ランディは立つ瀬がなかった。
「おまえら……」
　そんな彼らを見ていたグレイスが、ふふっと微笑んだ。
「面白いわね～、あなたたち」
　面白い？　と聞き返したランディに、うなずくグレイス。
「てんでバラバラな顔ぶれなのに、どこかまとまってる。なかなか良いチームみたいね」
　そう言って、ニコニコと笑うグレイス。どうやらイヤミではなく、本心から言っているようだった。しかし、以前手痛い目にあっているロイドは、社交辞令としか受け取らなかった。
「それより、仕事の話をしましょう」
　ロイドはなんとかイニシアチブを取ろうと、自ら話を振る。ここには、仲良くご飯を食べに来たわけではない。捜査に

行き詰まっていたロイドたちの前に現れたグレイスに、情報の取引を持ちかけられたからだ。彼女は、ロイドたちに『欠けたパズルのピース』を提供する代わりに、そちらの持っている情報をもらう、と言っていた。このままでは埒があかないと判断したロイドは、この取引に応じることにしたのだ。
「さっきひと通り話しましたが、旧市街での事件は、不良グループのサーベルバイパーも、テスタメンツも、身に覚えがないとのことでした。お互いにお互いがしかけてきた、そう考えているようです」
　ロイドたちはグレイスに会う直前まで、サーベルバイパーとテスタメンツの本拠地に乗り込み、彼らに事情聴取をしていた。
　といっても、一筋縄で話してくれる相手ではない。テスタメンツのリーダーであるワジにはさんざんからかわれ、サーベルバイパーのリーダー、ヴァルドに至っては、ロイドが彼にタイマン勝負を挑んで勝利し、ようやく話を聞き出した。
　だが、このあたりのことを話して、クロスベルタイムズに面白おかしく書かれてはたまったものではない。あくまで事情聴取の結果聞き出した、という筋書きにして、真実は伏せていた。
「ふぅん。彼らが素直に聴取に応じるとはねぇ……どんな魔法(アーツ)を使ったことやら」
　そう言いながらロイドを見てニヤリと笑う。どうやらグレイスは事情聴取でのやりとりを聞きたがっているようだ。ロイドはあわてて話を続けた。
「とにかく。あなたが持っている『欠けたパズルのピース』について、そろそろ話してくれませんか」
　身を乗り出して言うロイド。グレイスは、軽くしなを作って答えた。
「もし、イヤだ、って言ったら？」
　ロイドはいらだちを隠そうともせず、語気強く言った。
「グレイスさんのことを、今後一切信用しないだけです。お話をする機会も、今日で最後になるでしょうね」
　ロイドの様子を見てもなお、グレイスは口調を変えることはなかった。
「ウソウソ！　本気にしちゃやーよ。でも、その毅然としたところは結構いいわね～。優しげなマスクとのギャップがなかなかそそるって言うか～」
　ロイドはエリィたちの方を向き、さらりと言った。
「それじゃみんな、そろそろ捜査に戻ろうか」
　そう言って立ち上がるロイド。エリィとティオはそれに続いた。
「ええ、そうね」
「……ごちそうさまでした」

「あぁん、冗談だってば～。パズルのピースでしょ？　ちゃんと話してあげるから～」
　脱力しながら席に座るロイドに向かって、ずっと席に座ったままのランディが笑う。
「ハハッ！　モテモテじゃん」
　そんなランディに向かって、ティオはいつものジト目を向けるが、ランディ自身は気づいていないようだった。
　居住まいを正したグレイスが、少し声のトーンを落として話を始める。
「あなたたち、『ルバーチェ』って知ってる？」
　その単語を聞いた瞬間、ロイドとエリィの顔に驚きが広がった。
「その名前は……」
　つぶやいて、その後の言葉を飲み込んでしまうエリィ。ランディとティオは、事情が分からないといった様子だ。
「なんだよ。ふたりとも、豆鉄砲喰らったような顔して」
　ティオは、ルバーチェ、という言葉をつぶやいて、何かを思い出したようだった。
「『ルバーチェ商会』……クロスベル市で認可された法人に、そんな名前があったような」
　ティオの言葉を聞いて、グレイスが微笑む。先程までの楽しげな雰囲気とは少し違う、押さえきれない好奇心があふれ出た表情だ。
「そう、表向きは認可された法人。だけどその実体は――」
　弁士のように間を取り、ロイドたちを見回してから次の言葉を続ける。
「昔からクロスベルの裏社会を支配している『マフィア』よ」
　今度は、ティオとランディが驚く番だった。
「なるほど……そういうのがいるって噂は聞いたことあるが」
　ランディの言葉を受けて、ロイドが答える。
「クロスベルに住んでいたら、嫌でも耳にする名前だよ」
「さまざまなコネクションを持っている組織、という話を聞いたことがあるわ。有力者ともつながりがあるから、警察も簡単に手が出せない、とも」
　エリィの言葉に、裏社会はどこもそんなもんか、とランディがつぶやく。ティオが話を戻そうと、グレイスに尋ねた。
「その『ルバーチェ』が、どうかしたんですか？」
　グレイスは顔を近づけ、小声でしゃべる。
「最近『ルバーチェ』の構成員が妙な動きを見せているらしいのよ」
「妙な動き……ですか」
　ティオの問いかけに、こくりとうなずくグレイス。
「何でか分からないけど、あちこち忙しそうに動き回ってるわ。それで私も暇を見て、色々調べてる最中ってわけ」

グレイスの言葉を聞いて、ロイドが腕組みをしてつぶやく。
「マフィアが忙しそうに動いている……」
どう考えても、よい予兆ではない。ロイドの表情に苦いものが走る。エリィはグレイスに、抱いていた疑問をぶつけた。
「貴女が旧市街に来ていたのも、もしかしてそれと関係が……？」
エリィの言葉に、グレイス以外の全員が驚く。言い当てられたグレイスは、微笑を浮かべながら肯定した。
「そういうこと。ある筋から聞いたんだけど、半月ほど前、マフィアの構成員が旧市街をうろついていたらしくてね。しかも、人目を避けるように質素な格好をしていたらしいのよ。……何かあると思わないかしら？」
最後の部分は、ロイドたちを見回しながらゆったりと言った。ランディとロイドは、目を合わせる。
「……匂うな」
「ああ、プンプンする」
エリィもうなずき、ふたりの言葉に賛同する。
「ほぼ同時刻に起こった、二件の闇討ち事件。ふたつの不良グループが同時に事件を起こすという、本来ありえない状況でしか説明がつかなかったけど、そこに新たな第三の容疑者が現れたわけね」
手詰まり感があった捜査に、一条の光が見えた。しかし、ティオが疑問を差し挟む。
「……でも、おかしいです」
その言葉に、みんなの視線が集中する。
「何故、マフィア組織が不良グループのメンバーをわざわざ闇討ちに……？」
「ああ、問題はそこだ。何らかの敵対関係があるなら、話は単純なんだけど……」
ロイドの言葉に、乗り出していた身をイスにもたれさせながら答えるグレイス。
「うーん、あたしの知る限り、そういったイザコザは今まで無かったんだけどね～。同じ暴力的なところはあっても、マフィアはプロだし、不良たちは所詮アマチュア……。利害が絡むわけでもないから対立する接点がないのよね～」
そこに関しての情報は、グレイスといえど持っていないらしい。暴力によって成り立つ組織は、普段からあちこちで暴力を振り回したりはしない。ここ一番、というところで効果的に振るってこそ効果的だし、味方も摩耗しない。アマチュアであるサーベルバイパーやテスタメンツでも知っていることだし、プロのマフィアであるルバーチェなら、なおさら理解している。利害が絡まない対立は、考えられなかった。
ふとランディが思いついたらしく、人差し指を立てながら話し始める。

「どちらかのグループが相手を潰すためにマフィアと手を組んだってのはどうだ？　その場合、自分とこの闇討ちは偽装ってことになるだろうが……」
自信がないのか、後半はややトーンダウンしていた。ランディの推理に、すかさずエリィとロイドが反論を試みる。
「うーん……そこまでやるかしら？」
「ああ、少なくとも、あのワジとヴァルドのふたりにそこまでの険悪さは無かったな。どちらかと言うと、何となくお互いを認め合ってるような……」
ロイドの言葉に、グレイスは軽く驚いた様子だった。
「あら、鋭いじゃない。あたしの知る限り、あのヴァルド君とワジ君はいいケンカ相手って感じなのよね」
やっぱり、という感じでロイドがうなずく。グレイスはそのまま話を続けた。
「元々、あの旧市街にいたのはヴァルド君の『サーベルバイパー』だけだったんだけど……そこに二年くらい前、あのワジ君がふらりと現れて『テスタメンツ』を結成したのよ。当然、ヴァルド君たちに絡まれて締め上げられそうになったんだけど……」
グレイスの表情がワクワクとしたものに変わる。あきらかに、誰かに結果を言い当てて欲しいようだった。
「……ひょっとして、返り討ち？」
ロイドが驚きながら尋ねる。ヴァルドとタイマン勝負をしたロイドにとって、あの優男風のワジがヴァルドを返り討ちにしたというのは、少し信じられないことだったからだ。そして、事実は小説よりも奇なり、だったらしい。
「そうそう、そうなのよ！　ワジ君、ああ見えて、格闘術をやってるみたいでね。目にも止まらぬパンチとキックで油断してたヴァルド君を叩きのめしちゃったらしいの！」
グレイスの野次馬根性丸出しな解説でも、ワジの強さは伝わった。ランディたちも驚きの表情をしていた。
「は～、あんなかわいい顔してそんなに強かったのかよ」
グレイスはおしゃべりをしながら、お皿にのっかっていた餃子をひとつ、口に放り込んだ。
「まあ、最初は油断しただけで、その後は何度かやり合ってほぼ互角の勝負みたいだけどね。でも、そういう経緯があるから、お互い認め合っているみたいよ」
「なるほど、ライバルと言うわけですか」
「そういうこと」
エリィの問いかけに答えつつ、皿の上に残っていた餃子をポイポイと口に放り込む。その健啖振りに若干あきれつつ、ランディが言った。
「となると、マフィアを利用して相手を潰そうって線はナシか」

ロイドはうなずいて、ランディの考えを肯定した。

「ふたりとも人望は厚そうだから、手下の暴走という線も考えなくていいだろう。うーん、そうなると……」

考え込んだロイドの横顔を見て、グレイスは懐かしいものを見るような目をして、ふっと微笑んだ。彼女が見ていたのは、ロイド本人ではなく、その向こうにいる、誰かのようだった。

「――あたしとしたことが、サービスしすぎちゃったかな？」

グレイスのつぶやきにロイドが気づいた時には、彼女は既に席から立っていた。

「他の取材があるから、これで失礼させてもらうわ」

彼女は円卓の上にあったオーバルカメラと伝票をさっと掴むと、空いている方の手でひらひらと手を振った。

「ま、せいぜい頑張って、良い記事を書かせてちょうだい。おごり損ってことにならないようにしてね」

まったね～、と能天気な声を出して、グレイスは出口に向かって歩いていった。彼女が立ち去るのを見とどけると、ロイドは、ふぅ、と肩で息をする。その様子を見て、エリィがクスリと笑った。

「ああいう人は苦手？」

「え、あぁいや、そういうわけじゃないけど……」

押しの強い人間、特に女性には、少し苦手意識を感じているロイドだった。捜査官としては、苦手なタイプの人間がいることはあまり好ましくないとは分かっているのだが、こればかりはどうしようもない。

「我が道を行くって感じの人だものね。でも、彼女のおかげで、かなり情報が揃ってきたわ」

エリィの声も心なしか弾んでいる。ロイドは、真面目な顔でうなずいた。

「マフィアの話が聞けたのはかなり大きな収穫だった。問題は、どうして旧市街に介入しているかだけど……」

そこまで言って、ロイドはもう一度考えこむ。

「……難しいな。判断するには、情報が少なすぎる」

ティオがロイドの推理を捕捉すべく発言する。

「警察のデータベースでも見た覚えはありません……。セキュリティの高い場所に隠されているみたいですね」

「機密情報ってか」

ランディの問いに、エリィが答える。

「その可能性は高そうね……彼らは『ルバーチェ』だから」

エリィの言葉には、言外に警察内部との癒着があるであろうことが含まれていた。そちらの線から情報を集めようにも、困難が予想される。ロイドはしばらく考えたあと、一度支援課へ戻ることを提案した。

「セルゲイ課長の判断を仰ぐ必要があると思う。なんとか自

力で解決したかったけど、そうも言ってられないみたいだ」

ロイドの判断に、エリィたちはうなずいた。

「そんじゃ、とっとと戻って、オッサンを捕まえるとすっか」

ランディの号令で、ロイドたちは席を立った。

支援課ビル内にある課長室。セルゲイは普段から、ここに詰めている。

大きな窓が壁面につけられており、採光は良い。部屋の広さにはゆとりがあり、全体の半分も使ってはいない。だが、いざとなればここに支援課全員が集合することを考えれば、広すぎるということはないだろう。部屋の奥には大きな本棚がふたつあり、連結棚によってつながれている。本の中身は警察関係の資料や法律関連の書物が大半である。

その本棚の前には大きなデスクが置かれている。しかし、いつも書類や本が山積みにされており、実質的に使えるスペースはあまり広くはない。セルゲイはデスクに備えつけのイスに足を組んで座り、資料に目を通していた。

コンコン、とノックの音がする。入れ、と答えると、ロイドを先頭に支援課メンバーの四人が入ってきた。セルゲイは資料から目を上げ、彼らを出迎える。

「不良共のケンカ、ちゃんと止めてきたのか？」

その言葉に、ロイドはなんとも言えない、といった表情を浮かべた。

「課長……それなんですが、少しやっかいなことになってきたかもしれません」

なんだ？　という顔のセルゲイに向かって、ロイドはこれまでの経過を報告した。不良グループはサーベルバイパーとテスタメンツという、旧市街で相争う二大勢力であること。彼らが反目し合うのは、同時に発生したという不可解な闇討ち事件だということ。そしてそこに、第三の勢力として『ルバーチェ』が浮かび上がってきたこと。

特に、ルバーチェの名前を出した瞬間に、セルゲイの眼光が鋭く光ったことを、ロイドは見逃さなかった。

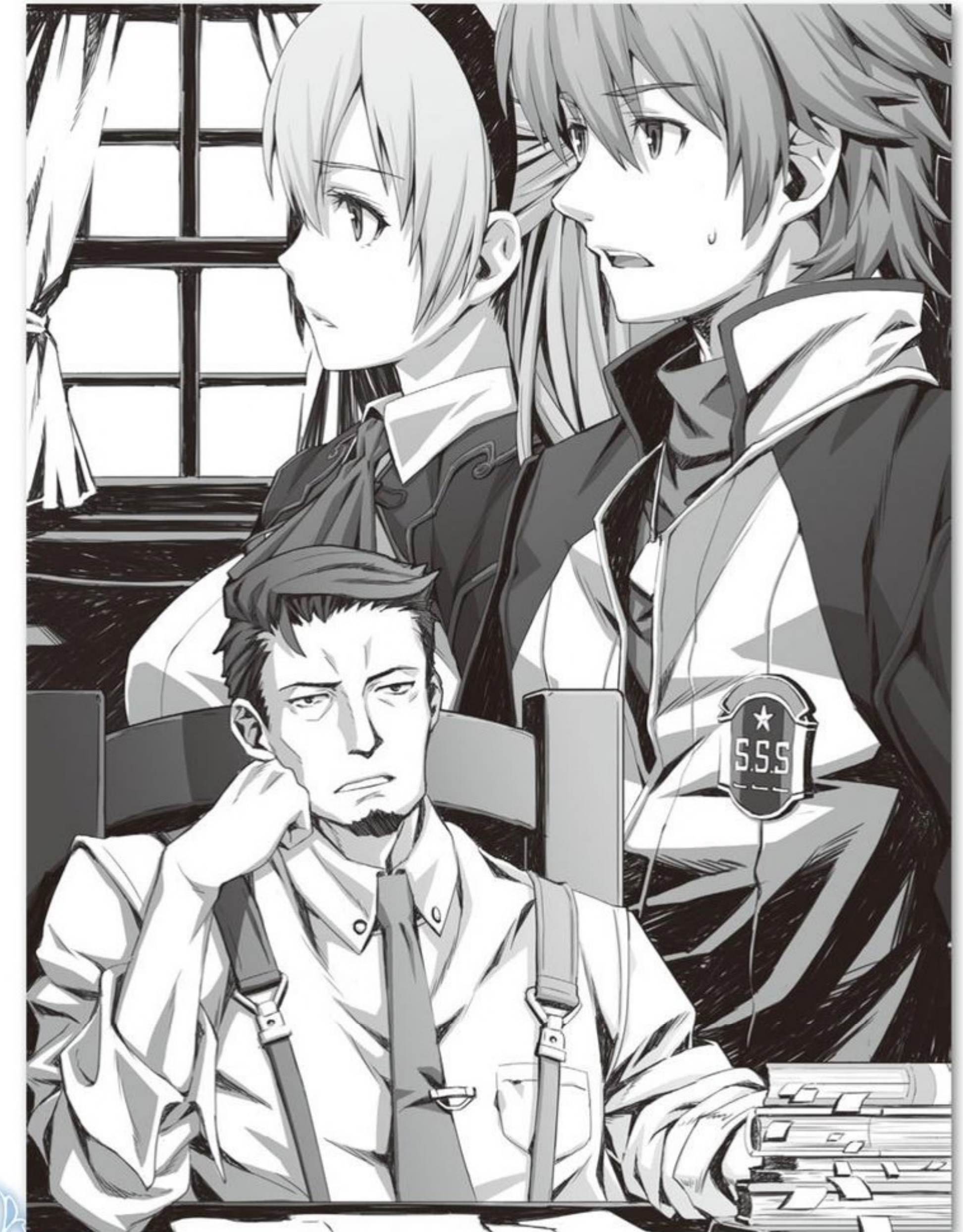
「……ふん、なるほどな」

それだけ言うと、セルゲイは押し黙ってしまった。普段からなにを考えているのか読みづらい顔だが、こういう時はまったく読めなくなってしまう。どのタイミングで声をかければいいものか、ロイドは分からなかった。さすがにそろそろ声をかけた方がいいか、と思ったその時。

「……そうだな。この件に関しては、おまえたちにすべて任せた」

唐突にそんなことを言われ、ロイドは面食らってしまった。それは、他の支援課のメンバーも同じようだった。エリィが真意を尋ねようとする。

「あの、それはどういう？」
「ここで引くも、さらに突っ込むも、判断は任せたって言ってるんだ」
捜査を指揮する課長職にあるまじき発言だった。さらに、セルゲイは続ける。
『ルバーチェ』の件に関しても、おまえたちに教えることはない。全部、自分たちで調べてみろ」
判断を仰ぎつつ、新たな情報を入手できれば、と思っていたロイドのもくろみは早くも崩壊してしまった。
「そ、そんな無茶な……」
そんなことを思わず口にしたロイドに向かって、セルゲイは言い放った。
「……俺が止めろと言ったら、おまえらは納得できるのか？」
普段の飄々としたセルゲイの雰囲気とは違う、ずしりと重いトーンの言葉に、ロイドたちは息を呑んだ。
「え……」
「マフィアの件に関しては、それだけ面倒くせぇ問題なんだ。もし俺が上司としてマトモな判断をするんだったら、止めろとしか言いようがない」
そこまで一気に言い、少し間を置いてセルゲイはロイドに問いかけた。
「それでいいのかよ？」
セルゲイの視線を真っ正面から受け止め、ロイドは考えた。
確かにセルゲイに判断を仰ごうとは考えたが、捜査の中止を言い渡されることは、正直想定していなかった。しかも、『マフィアがらみはやっかいだ』という理由では。そして、実際に言われたとして、自分がどう答えるだろうかも考えた。答えはすぐに出た。
「……いえ」
ロイドの思いを代弁するかのように、ランディが続ける。
「ま、ここで打ち切りってのはさすがに後味が悪いかもな」
「そうね……色々と知ってしまったし」
「……同感です。」
エリィやティオも同意する。三人は顔をあせて、気持ちを確かめあった。
「みんな……」
口にするまでもなく、自分と意識が共有できていることに、ロイドは喜びを感じていた。
そんな彼らのやりとりを見てセルゲイはニヤリと笑ったが、その笑顔は一瞬で隠してしまったので、ロイドたちは気づくはずもなかった。
「――まあ、そうだな。何も知らない小僧どもが足を滑らせて大ケガでもしたら寝覚めが悪(ワリ)ィしな。せめて良い助言者(アドバイザー)をおまえらに紹介してやろう」



セルゲイの言葉に、ロイドがきょとんとした表情を浮かべる。
「いい助言者、ですか」
そうだ、と言いながらセルゲイはイスから立ち上がる。散らかっているデスクの一角に置かれた名刺入れを手早く探し、目当てのものを見つけると、ロイドに向かってそれを差し出す。
ロイドはデスクごしにそれを受け取り確認する。どうやら名刺のようだった。
「『グリムウッド法律事務所』？」
どこか聞き覚えのある名前だな、とロイドは思った。
「西通りにある法律事務所だ。イアンって名前の弁護士先生がいる」
イアン、という名前を引き金にして、記憶が蘇ってくる。
「ああ……！　あのパン屋の裏手にある。そういえば俺も、前いた時、何度か挨拶くらいはしてますね」
イアンの名前を聞いて思いだしたのは、ロイドだけではなく、エリィもだった。
「私も聞いたことがあります。確か、企業や貿易商などの法律相談をしている先生ですよね？」
「ってことは、大先生じゃねーの？　俺らと会ってくれるのか？」

ランディの問いかけに、エリィはにっこりと微笑んだ。
「大丈夫だと思うわ。そういう企業相手の仕事をこなす一方で、市民の法律相談にも親身に乗ってくれるって話だし」
エリィの言葉に、へぇ、と感心した声をあげるランディ。
「熊みたいな髭面してるから、『熊ヒゲ先生』なんて呼ばれている。あの先生なら、マフィアについてかなりの情報を持っているはずだ。ひょっとしたら……警察も知らない最新情報なんかもな」
セルゲイはこともなげに言ったが、ロイドたちは驚いてしまった。警察も知り得ない情報を、市井の弁護士が持っている。それだけで、その弁護士の凄さが分かるというものだ。
「いったい何者だよ、その先生は？」
「ま、会えば分かるさ」
ランディの呆れにも似た感嘆の声に、セルゲイはシンプルに答えた。
「前に俺が会ったときに、特務支援課のことは話している。おまえたちの身分を明かせば、話ぐらいは聞いてくれるはずだ。この機会に挨拶しとけ」
ロイドは居住まいを正して答える。
「わ、分かりました」
そして、そのままエリィたちに向き直り言った。
「西通りならすぐ近くだ。さっそく行ってみよう」

了解！　という言葉と共に、彼らはロイドについていく。彼らが出ていくと、課長室は以前の静けさを取り戻した。
セルゲイはイスに座り直し、胸元のポケットからタバコを取り出す。手慣れた手つきでタバコに火をつけ、一服した。
「『ルバーチェ』相手にどこまでやれるか、お手並み拝見させてもらうぞ」
若き支援課のメンバーたちに向かってそうつぶやき、セルゲイは一服を楽しんだ。

クロスベル市街、西通り。生活感あふれるこの通りにあるベーカリーカフェ《モルジュ》の裏手に、ロイドたちが目指す場所があった。
エリィが看板を指さす。
「グリムウッド法律事務所……うん、ここがそうみたいね」
ロイドが腕組みをしながら、少し考え込んだ様子で言った。
「それにしても、そのイアン先生という人は何度か見かけたことがあるけど……そんな偉い先生だなんて、思ってもみなかったな」
「ハハッ。ま、人は見かけによらないってね。この俺のように」
「ランディさんは、見た目どおりの人だと思います」
ランディの軽口に、律儀に突っ込むティオ。そのやりとりを見て、緊張していたロイドの心が少しほぐれた。

その時、法律事務所の木製のドアが開き、中からスーツ姿の男が出てきた。年の頃は20代後半~30代前半くらいだろうか。藍色のスーツをきっちりと着こなし、髪も整えられており、おまけに黒縁のメガネまでかけている。一見しただけでエリートであることが分かる風体だ。だが、知的な風貌に似合わず身体はかなり鍛えられており、上にスーツを着ていても分かるほどの肉づきの良さだ。
スーツの男は玄関先で、扉の向こうにいるであろう人物に頭を下げた。
「それでは先生、今後ともよろしくお願いします」
扉の向こうから、壮年の男の声がする。先生と呼ばれた人物だろうか。
「ああ、それはいいが……君たちのところは、もう少しなんとかならんのかね？　少しは市民の気持ちというものをだね……」
「……市民の人気取りが仕事ではありませんので。それでは失礼します」
壮年の男の話を遮り、スーツの男が話を切り上げ、玄関先から立ち去る。そのまま、ロイドたちがいる方に向かって歩いてきた。男はロイドたちの姿を見つけると、軽く驚いたようだった。
「おまえたちは……」

見ず知らずの相手に驚かれ、ロイドは戸惑う。

「な、何か……？」

どう対処してよいのか分からず、多少しどろもどろな問いかけになってしまう。その様子を見てかどうかは分からないが、スーツの男はフッと鼻で笑った。

「なるほどな……セルゲイさんが飼い始めた仔犬どもというわけか」

意外な人物からセルゲイの話が出て、驚くロイドたち。よく見ると、男の胸元には、クロスベル警察の捜査官を示すバッジがついていた。

「そのバッジ……あなたもクロスベル警察の？」

しかし、男はフンと鼻を鳴らし、露骨な嫌悪感を表した。どうやら、ロイドたちと同じ組織であるとは認めたくないようだった。

「私のことはどうでもいい。それより、イアン先生を訪ねてきたようだが……」

そこまで言うと、ロイドの前に一歩出て、威圧的に見下ろす。

「くれぐれも余計な時間を取らせるんじゃないぞ。おまえたちのような役立たずと違って、色々と忙しい人だからな」

「なっ……!?」

役立たず、という言葉に色めき立つロイド。しかし、男は相手をするつもりはないらしく、そのままロイドたちの脇を抜けて、立ち去っていってしまった。

男が立ち去るのを見送ったあと、ロイドが声をあげる。

「な、なんだアイツは!?」

エリィは、男が立ち去ったあとを見つめながら答えた。

「どうやら本部の捜査官みたいだけど……」

「……居丈高な感じですね」

エリィが言いよどんだことを、ティオがずばり言う。だが、ランディは少し違う印象を持ったようだった。

「しかしあのメガネ、随分とやるみたいだったぞ」

やる、という言葉の意味が分からず、エリィがきょとんとする。ランディは自分の左脇をポンポンと叩きながら言った。

「左脇のところに、デカい得物を吊るしてたな」

きょとんとしていたエリィの顔が、驚きに変わる。それはロイドも同じだった。

「得物って、拳銃か？」

「他になにがあるんだよ」

「よく気づいたわね……」

しかしティオは、驚いた様子もなく言った。

「わたしもセンサーで感知しました。大型の軍用拳銃……といったところでしょうか」

ティオの発言を、ランディが肯定する。



「ああ、多分そうだろ。警察の支給品じゃ、あんなに膨らみはしない。それにあれだけ鍛えてりゃ、反動の大きな軍用拳銃だって使いこなせるんじゃねーの？」

ふたりの会話に、ロイドとエリィは感心しきりだ。エリィが素直な感想を述べる。

「ふたりとも、凄いわね……」

たまたま分かっただけさ、と笑いながら答えるランディ。ロイドなどは、いまだに驚いていた。そんなロイドに、ティオが提言をする。

「それより、弁護士の先生を訪ねなくてもいいんですか？」

その言葉で、一同はここに来た目的を思い出した。

「そうだな。忙しいところを悪いけど、挨拶させてもらおうか」

ロイドを先頭に、グリムウッド法律事務所のドアをくぐった。入ると、大きな室内全体を見回せる開放感ある作りがまず目に飛び込んでくる。壁を設けず、ステップフロアによって応接スペースと仕事用スペースを分けているためだろう。

玄関を入ってすぐに応接スペースがあり、年代物のソファとテーブルセットが置かれている。観葉植物なども置かれ、相談に来た来客者をリラックスさせようという心遣いが感じられる。

ステップフロアはL字型となっており、応接スペースを囲むような構造だ。その一番奥、質素なデスクで、壮年の男性が何かの紙資料を読んでいた。年の頃は40代後半だろうか。少しでっぷりとした体躯を、白のYシャツと焦げ茶のズボンに押し込んでいる。ダークシアンのベストときっちりしめられた黄色いネクタイのおかげで多少かっちりした印象を与えるが、先程のスーツの男と違い、人を拒絶するような雰囲気はない。それは、男の顔に生えている立派な髭のせいだろう。あご髭と鼻下の髭、それにもみあげがつながり、なんとも愛嬌のある顔になっている。銀縁のメガネも人を威圧するような雰囲気はなく、年相応の落ち着きを感じさせるものとなっていた。

男は、ロイドたち来客に気づき、声をかけてきた。

「おや、忘れ物かね？」

先程のスーツの男が戻ってきたのかと勘違いしたようだ。すぐに見知らぬ相手だと気づき、態度を改め、営業用の声を出す。

「おっと、これは失礼した。グリムウッド法律事務所へようこそ。今日は何か相談事でも？」

「あ、いや……」

ロイドがどう話を切り出そうかと考えている間に、男はデスクを離れ、ロイドたちのいる応接スペースへと歩いてきた。

「いやいや。遠慮することはないよ。まだ若いようだが借金などで困ったことでも？　それとも仲間を集めて事業でも起

こしたいのかね？　何でもいい、どーんと相談してくれたまえ」

ロイドに二の句を告げさせる間もなく、一気にまくし立てる。男のパワフルな一面が垣間見えるようだ、とランディなどは思った。

ティオが小声で、隣にいるエリィにささやく。

「この人が『熊ヒゲ先生』ですか……」

「噂どおりの方みたいね」

クスリと笑いながら、エリィが答えた。

戸惑っているロイドの顔を見つめていた男は、ふと何かに気づいたようで、眉根を寄せた。

「……おや？　よく見れば、君の顔……どこかで見たことがあるな。確かこのあたりに住んでいた子じゃなかったかね？」

「あはは……覚えててくれたみたいですね。三年くらい前に近くのアパルトメントで暮らしていました」

ようやく話すきっかけができてひと息ついたロイドが答える。そして、姿勢を正して自己紹介をした。

「改めまして――ロイド・バニングスといいます」

「おお、そうか。道理で見覚えがあると――」

男は笑顔で答えたが、バニングスという名前を聞き、また何かを思い出したようだった。

「ん？　バニングス……!?　ひょっとして……ガイ・バニングスの弟さんか？」

思わぬところで兄の名前が出てきたに驚きつつ、ロイドが答える。

「あ……はい。ひょっとして、兄のこともご存知だったんですか？」

「ご存じもなにも……」

そこまで言い、男は遠くを見るような目でロイドを見つめた。あきらかにロイドではなく、その向こうにいるガイを見ている視線だった。少し居心地が悪いのか、ロイドが戸惑いつつ、仲間たちの方を振り返る。男はそこではじめて、ロイドが着ているジャケットの背中にあるクロスベル警察の紋章に気づいたようだった。

「……ふむ、どうやら事情があって来たようだね。こんな所で立ち話もなんだ。ソファにかけたまえ」

応接セットへロイドたちを促しつつ、大きな体躯を揺らし、ドタドタとステップフロアを上っていく。

「あいにくコーヒーしかないのだが、それでかまわないかね？」

「あ、お構いなく」

ロイドが声をかけた頃には、すでに男はカップを並べ、ポットに入ったコーヒーを注いでいた。ランディがソファに腰掛けながら、エリィにささやく。

「なんというか、完全に向こうのペースだな」

エリィは苦笑しつつ、ランディに同意した。

ロイドたちがソファに座って少し経つと、トレイにコーヒーカップを五つ乗せ、男が戻ってきた。手慣れた手つきで各自の前にコーヒーを置き、テーブルの真ん中にミルクピッチャーと砂糖が入ったポットを置くと、ソファにどっかと腰掛ける。

「ミルクと砂糖はお好みでどうぞ。お嬢さん方には、少し苦いかもしれないが」

ありがとうございます、と微笑むエリィ。ティオは、どうも、とだけ言って、さっそく砂糖をポットから自分のコーヒーに入れていた。

男は胸元のポケットから名刺入れを出しつつ、ロイドに向かって言った。

「あらためて自己紹介といこう。私の名は、イアン・グリムウッド。この法律事務所で弁護士をしている」

イアンから差し出された名刺を受け取りつつ、ロイドが答える。

「ロイドです。こっちから順にエリィ・マクダエル、ティオ・プラトー、ランディ・オルランド」

ロイドは言いながら、各自を指し示す。

「はじめまして」

「どうも」

「こんちはっス」

それぞれ個性的な挨拶を聞いて、イアンはニコニコと笑っていた。

「君たちは見たところ、クロスベル警察の人らしいが？」

「はい。できたばかりなのでご存じないかもしれませんが、俺たちは特務支援課というセクションです」

イアンは片方の眉だけを器用にあげた。どうやら軽く驚いた時のクセらしい。

「あぁ、なるほど……君たちがセルゲイ君の言ってた新人か」

セルゲイの話どおり、すでにイアンは支援課のことを知っていたようだった。

「そういえば最新のクロスベルタイムズも読んだよ。着任早々、なかなか頑張ってるみたいじゃないか」

グレイスが書いたクロスベルタイムズの記事は、イアンにも読まれていたらしい。ロイドが苦笑しながら答える。

「何だか散々なことを書かれちゃってますけど……」

ロイドたち特務支援課の初仕事は、グレイスによってさんざんな書かれようをしていた。多少過剰な表現があったとはいえ、大半は事実なので反論もできない。

「なあに、あそこは昔からあんな調子だ。気にすることはない。彼らも認めざるを得ないよう、大活躍すればいいだけのことだ」

そう言って笑いながら、コーヒーをひと口飲む。イアンのおおらかな話しぶりに、自然とロイドの顔もほころんだ。イアンは、そんなロイドの顔を見ながら、しみじみとつぶやいた。

「しかしそうか……あのガイ君の弟さんが警察に。何だかこう、空の女神(エイドス)の巡り合わせを感じるねぇ……」

そうして、ひとりうなずく。

「あの……先生は兄とはどういう？」

「ああ、今の君たちと同じくたまに情報交換に来てくれたんだ。もっとも、彼は非常に優秀な捜査官だったからね。逆に私の方が色々と助けてもらったくらいだよ」

ロイドはうなずきながら、ここでも兄の背中を見ることになるのか、と内心つぶやいていた。兄が優秀なのは誇れることだし、我がことのようにうれしく感じることもある。だが、時として重荷となることがあるのも事実だった。

と、エリィが軽く驚いた様子でロイドに問いかける。

「ロイド……あなた、捜査官のお兄さんがいるの？」

「なんだよ、水臭ぇな。そんなことひと言も聞いてないぜ？」

エリィと同じく、ランディも驚いた様子だ。ティオは黙ったまま、ミルクと砂糖がたっぷり入ったコーヒーをすすっているが、その目はロイドをじーっと見つめていた。

ロイドは彼らに兄のことを話していなかったことに気づき、詫びた。

「はは、ゴメン。つい言いそびれててさ。それに……もう亡くなった人だから」

できるだけさらりと言ったつもりだった。だが、エリィの顔には、先程とは違う驚きが広がる。

「あ……」

「仕事中に殉職したんだ。ちょうど三年前になるかな」

エリィはなんと言っていいのか分からず、口ごもってしまう。代わりに、ランディが話を受けた。

「三年前……そうか、それでおまえ、しばらくこの街を離れて……」

ああ、とロイドはうなずいた。ロイドは親戚の家に身を寄せ、捜査官を目指すべくクロスベル警察学校に入校したのだ。

エリィが肩を落とし、伏し目がちに謝った。

「ごめんなさい、ロイド。その……」

エリィにこれ以上気を遣わせないよう、あくまでいつもの調子で返す。

「いいんだ。言ってなかった俺のせいだから」

だが、一度重くなってしまった空気は、なかなか戻るものではない。イアンが手にしていたマグカップをテーブルに置く音がやけに響いた。

「……ガイ君のことは残念だった。私も個人的に、あの事件のことは調べてみたこともあったが……。残念ながら、手がかりすら見つかっていない状況でね……」

　イアンのその言葉を聞き、ロイドの胸がチクリと痛む。生前の兄を知り、この街の情報にも通じているというイアン弁護士なら、兄が死んだ事件について、なんらかの情報を持っているのではないかと思っていたからだ。しかし、その望みはあっけなく散ってしまった。

　だが、今はそのことを悲しんでいる時ではない。ロイドは頭を切り換えた。

「――いや。今は兄のことはいいんです。それよりも先生。今日ここに来たのは、お聞きしたいことがあるからなんです」

「ああ、なんでも聞いてくれたまえ。話せる範囲でだが、協力しよう」

　イアンの返答を聞き、ロイドは単刀直入に問いかけた。

「『ルバーチェ』について、何かご存知のことがあれば聞かせていただけませんか？」

　イアンは片方の眉だけを上げた。そのまま軽く思案するように、あご髭を手で撫でる。

「ふむ……『ルバーチェ』か」

　それは、新人であるロイドたちにどこまで話すべきなのか、考えているようだった。

「……彼らにまつわる黒い噂は多い。帝国と共和国にまたがる密貿易。盗品売買に、ミラ・ロンダリング。猟兵団の斡旋や武器の密売まで……。そのどれもが、クロスベルの特殊性を利用したものと言えるだろう」

「クロスベルの特殊性……？」

　ロイドの問いかけに、エリィが答えた。

「近年ますます盛んになっている貿易業と金融業の発展……それと反比例するかのように脆弱きわまる政治基盤ですね？」

　イアンは大きくうなずく。エリィは市長の娘として。イアンは街の弁護士として。立場は違えど、政治状況に関する憂いは共通するものがあった。

「このクロスベル自治州の政治基盤は極めて弱い。多くの政治家は、帝国派か共和国派のどちらかに属しており、利権をむさぼる者が多いんだ」

　イアンは一気に言い切ると、コーヒーをひと口すする。苦い顔をしたのは、冷めかけのコーヒーのせいだけではないのだろう。

「そして、マフィアの暗躍を取り締まる法案が出されたとしても……彼らと癒着した議員に潰される」

　その言葉に、まさか、といった表情でランディが問いかけた。

「なんだそりゃ……本当なのか？」

　エリィが沈痛な面持ちで答える。

「……残念だけど、本当よ。ルバーチェの利権とつながっている議員は相当多いと言われているわ。おそらく、警察が動けないのもそれが最大の理由でしょうね」

「……大人の事情、ですか」

　それまで黙ってコーヒーを飲んでいたティオが、ため息と共につぶやく。大人の事情というものに振り回されてきた彼女なりに、思うところがあったのだろう。

「それではルバーチェは実質上、犯罪を起こし放題なんですか？」

　ティオに尋ねられたイアンは、かぶりを振ってそれに答えた。

「いや、さすがにそれはない。あからさまな犯罪を放置すれば市民や周辺諸国も騒ぐだろうし……今のところは『市民生活に直接迷惑はかけない』という一線だけは、ルバーチェ側も守っているようだ」

　そこまで言うと、イアンはソファに身体をあずけて、少し疲れた様子で言った。

「逆に、その一線を越えなければ何をやっても警察は動かない……そう高を括っているところもあるみたいだがね」

　その言葉に、ロイドは絶句してしまう。ランディは、何かを得心した様子でうなずいていた。

「なるほどなぁ。活気ある華やかな都市の裏側に、魑魅魍魎（ちみもうりょう）のうごめく影アリか」

「……機密レベルの高い情報をチェックしておきたいですね……」

　ティオはティオで、やる気になっているようだった。相手がルールに則らないとするならば、こちらも多少逸脱しても、情報を手に入れようと考えている様子だ。

　イアンはソファに身体をあずけたまま、話を続ける。

「まあ、ルバーチェの基礎知識は大体そんなところだが……」

　よっと、という声と共に身体を起こし、ロイドたちの方に身を乗り出して言った。

「――しかし、ここ最近、少し風向きが変わってきていてね」

　イアンの口ぶりから、何かあると察したエリィが続きを促す。

「どういうことですか？」

「これはまだ、警察の方でも掴んだばかりの情報らしいが……最近、どうやらルバーチェの対抗勢力が現れたらしいんだ。それもかなり強力な、ね」

　マフィアに対抗しうる勢力となると、相応の実力と規模のある組織だ。ロイドがまっさきに思いついたのは、遊撃士協会だった。だが、それを口にすると、イアンは首を横に振った。

「対抗勢力といっても悪い意味でだよ。カルバード共和国の東方人街に一大勢力を構えている組織……というか、マフィアだね。それが、このクロスベルに進出し始めているらしいんだ」

　別のマフィアが、このクロスベルに現れた。そのショッキングな情報を聞いて、ロイドは思わず腰を浮かせた。

「なっ……！」

「ほ、本当ですか⁉」

　ロイドと同様にエリィも驚く。イアンは深くうなずき、腕組みをした。

「以前からそんな噂はあったが、どうやら事実だったらしい。――組織の名は、『黒月（ヘイユエ）』。そしてつい半年前、クロスベルの港湾区にできたのが『黒月貿易公司』という」

「『黒月』……」

　ロイドのつぶやきに、ティオが素直な感想を言う。

「……いかにも東方風の名前ですね」

　ランディが軽く肩をすくめながら、ぼやきのように話す。

「しかしマフィア同士の抗争か……。こりゃ、不良同士のケンカどころの騒ぎじゃないぜ」

　飄々とした語り口が信条のランディも、調子が出ないようだ。

　イアンは腕組みしていた右手をほどき、そのままあご髭を撫でた。

「幸いにしてというべきか……まだ、その抗争そのものは表立っては始まっていないらしい。しかし近いうちに何らかの形で暗闘が始まるかもしれない……。警察の捜査一課などはそれを警戒しているようでね」

　捜査一課、という単語を聞き、ロイドは驚いた。ここに来てから、驚きの連続だと我ながら思う。エリィは、少し考え込むようなそぶりを見せてから、イアンに尋ねた。

「もしかして、先ほどこちらを訪ねていた眼鏡の男性は……？」

「ああ、捜査一課に所属するダドリー君という捜査官だ。ちょうど、今話している事と同じような話をしに来たのさ」

「そうだったんですか……」

　エリィの言葉を聞きながら、ロイドは考えにふけっていた。イアンの話は驚きの連続だが、それはすなわち新情報が多く手に入ったということだ。そして、それらの『新しいピース』が、綺麗にはまる推理が組み立てられそうだ、という予感を感じていた。

「ロイドさん……？　どうしたんですか？　そんな難しそうな顔をして……」

　ティオに声をかけられ、ようやく我に返った。ロイドの様子を見て、ランディも何かを察したようだった。

「ひょっとして、何か気づいた事でもあるのか？」

「ああ……まだ完全にはまとまってはいないけどね」

　そう言いながらロイドは、一刻も早くこの推理を組み立てたい思いに駆り立てられた。こういう時は、ひらめきが消える前に、アウトプットした方がよい。警察学校での授業での経験などから、ロイドはそう思った。そうと決まれば話は早い。ロイドはソファから立ち上がった。

「――先生。ありがとうございました。先生の情報のおかげで解決の糸口が見えた気がします」

　そう言って、頭を下げる。仲間たちも立ち上がった。

「そうか……それは何よりだ」

　イアンも立ち上がり、ロイドたち支援課のメンバーを見回した。

「セルゲイ君には世話になっているし君たちの事は個人的に応援している。また何かあったらいつでも訪ねてきてくれたまえ」

「はい、ありがとうございます。それでは、失礼します」

「ありがとうございました、先生」

「コーヒー、ごちそうさまでした」

「どもっした」

　各人、思い思いの挨拶をして、事務所を出ていく。彼らがドアを閉めた後。

　イアンはドアの向こうに消えたロイドの背中を思い出していた。

「……そうか、ガイ君の弟さんか……」

　ふう、と小さなため息をひとつつき、カップに残っていたコーヒーを飲み干した。

第五章　抗争の疑惑（前編）　了



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.05

発行人	吉田隆
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 田中一寿
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

日本ファルコム音楽CDが一挙5タイトルリリース！

日本ファルコム音楽の集大成がここにある！

日本ファルコムから7月14日に一挙5タイトルの音楽CDが発売。まずは、PSP『イースvs.空の軌跡 オルタナティブ・サーガ』の限定版に付属していたサントラ『イースvs.空の軌跡 オルタナティブ・サーガオリジナルサウンドトラック』と『ファルコムベストサウンドコレクション -All in All-』。そして、ファンからの要望も高かった『ぐるみん オリジナルサウンドトラック』。さらには、一般ユーザー投票によりカラオケ配信が決定したファルコム人気ボーカル曲を収録した記念アルバムの第2弾と第3弾だ。



『イースvs.空の軌跡 オルタナティブ・サーガ オリジナルサウンドトラック』 2,940円（税込）



『ファルコムベストサウンドコレクション -All in All-』 2,940円（税込）



『ぐるみん オリジナルサウンドトラック』 3,129円（税込）



『VOCAL2』 2,940円（税込）



『VOCAL3』 2,940円（税込）

あの冒険がオンラインで再び!

ファルコムの名作RPGがモバイルオンラインゲームになって帰ってきた。「合成」「ギルド」のふたつの要素で楽しむミッションでは、アドルやアイシャなどお馴染みのキャラクターが登場してサポートしてくれる。また、ゲーム内の条件を満たすことによって新規描き下ろしを含むイースキャラクターの待ち受け画像もゲットできる。GREEにて配信中。

零の軌跡 エニグマライブ壁紙アンドロイドアプリ

きみの携帯がエニグマに!!



画面をタッチするとキャラクターの表情が変わる「ライブ壁紙」を初めとする多数の機能がついた『零の軌跡』のAndroid用アプリが登場。クォーツをはめこんで機能を選択する「エニグマモード」など、携帯で『零の軌跡』の世界観を楽しめるぞ。Androidマーケットにて7月上旬発売予定（発売記念価格500円）。発売元：キャラアニ



エステルがネグリジェ姿で小説を朗読!

キャラクターが小説を名作朗読するiPhoneアプリ『朗読少女』とのコラボレーション。『英雄伝説シリーズ』に登場する作中小説を朗読してくれるエステルのネグリジェ衣装に続き、正遊撃士衣装も好評配信中！　また、背景の棚に飾れる人形も続々発売される。ヨシュアやティータなどお気に入りのキャラを飾って楽しもう。衣装450円。人形は各115円。

イベント

アニメ『空の軌跡』イベントの開催が決定!



先日豪華キャスト陣が発表され、ますます盛り上がるアニメ『空の軌跡』。なんと10月9日、調布グリーンホールにて、ファン待望の上映イベントが開催されることが決定した。エステル役の神田朱未さん、ヨシュア役の斎賀みつきさんほか豪華ゲストとともに、いち早くアニメ本編を楽しむことができるのだ。詳しくは公式ＨＰ（http://www.sora-anime.com/）をチェック！